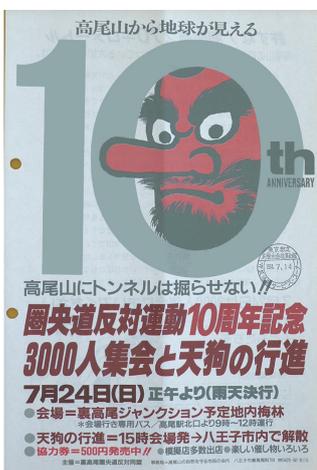


# 法政大学 大原社会問題研究所 環境アーカイブズ ニューズレター



## CONTENTS

- 環境アーカイブズでの5年間を振り返って(清水善仁) … (2)
- 多様な環境資料にふれて一文書・視聴覚資料整理の成果と課題(瀬尾華子) … (4)
- 資料紹介(長谷川達朗)・トピックス(川田恭子) … (6)
- 環境アーカイブズの約束—新型コロナ・パンデミックからの出発(山本唯人) … (7)
- 2020年活動報告・利用案内 … (8)



### 圏央道反対集会「3000人集会と天狗の行進」のチラシ

ミニコミの中にはしばしばチラシなどが挟み込まれている。法政大学多摩キャンパス近くを通る圏央道(首都圏中央連絡道路)の建設をめぐる、市民たちが起こした圏央道反対集会「3000人集会と天狗の行進」のチラシにはシンボルとなった高尾山の天狗が描かれている。

(0042東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料0042-0691, 1692, 0694, 0704, 0923, 2943)

(環境アーカイブズRA 宮崎翔一)

# 環境アーカイブズでの5年間を振り返って

中央大学文学部准教授 **清水善仁**

## はじめに

私は2020年3月まで環境アーカイブズ担当の任期付専任研究員として法政大学大原社会問題研究所に勤務してきました。2009年に発足した環境アーカイブズの草創期にその運営システムを確立した金慶南さんの後を受け、2015年4月の着任以降、環境アーカイブズの充実を目指して様々な取り組みをおこなってきた5年間でした。そんな私に、このたび「環境アーカイブズの今」というテーマでまとめられる本誌への寄稿を依頼されました。退職して間もない私が引き受けてよいものか...と逡巡する気持ちもありましたが、過去を振り返ることで今を再確認し、そして将来を展望することができればとの思いから、環境アーカイブズにかかわった5年間のなかで、特に重視したことや印象に残ったことのいくつかを述べてみたいと思います。小稿が環境アーカイブズの今後のために何らかの参考となれば、これに過ぎる喜びはありません。

## 目録化への注力

私が着任した当初、環境アーカイブズの資料整理作業は、目録の作成と資料のデジタル化が並行しておこなわれていました。これは前任の金さんの方針によるものですが、デジタル化の作業は資料を一枚ずつスキャンするもので、かなり時間を要するものでした。むしろデジタル化の意義を否定するものではありませんが、それよりも環境アーカイブズが所蔵する資料の存在を明示し、かつ利用者のアクセスを担保するためには目録の公開を優先させることが不可欠と考え、デジタル化作業を止め資料の目録作成に注力する態勢にシフトしました。そのこともあり、私の在任中には「スモンの会全国連絡協議会・薬害スモン関係資料」をはじめ、多くの資料群の公開を実現することができました。これは偏に整理作業を担ったアーキビストやリサーチ・アシスタント(RA)、事務職員の皆さんの努力の賜物に他なりません。公開されている資料はいずれも公害や環境問題等を考察するうえで貴重なものばかりですので、多

くの方に利用していただきたいと思います。

そのうえで今考えることは、これからはデジタル化の作業に再び着手してもらいたいということです。私の在任中に多くの資料群の整理・公開を実現することができましたので、環境アーカイブズの次なるステップとして資料のデジタル化を推進することで、より資料へのアクセシビリティが高まることとなります。そのことは、現在のコロナ禍におけるアーカイブズ機関の直面する課題とも関係します。多くのアーカイブズ機関が感染拡大防止等の観点から臨時閉館や利用停止の措置を余儀なくされたことは記憶に新しいことですし、今後もまた同様の状況が訪れないとも限りません。そうしたなかで、デジタルアーカイブの持つ意義の大きさを改めて強く感じます。時空を超えた資料提供のツールとしてばかりでなく、「ステイホーム」や「新しい生活様式」という状況下におけるアーカイブズ機関の資料提供の在り方として、デジタルアーカイブの意義はこれまで以上に高まっているように思うのです。

## 『環境アーカイブズ・ニュースレター』の刊行

環境アーカイブズにとって変わらぬ課題の一つは利用者の少なさです。利用が多ければ良いというわけではありませんが、資料を保存・公開するアーカイブズ機関として、利用者数はその存在意義をはかるうえでの一つの尺度となることは疑いありません。利用を増やすには、環境アーカイブズとその所蔵資料の価値を学内外に広く知ってもらうことが不可欠と考え、私が着任した年度から本誌『環境アーカイブズ・ニュースレター』を刊行することにしました。紙媒体による配布とデジタル媒体によるWebサイトへの掲載という二つの方法で発信することとし、幅広い方々への執筆依頼と多様な記事の掲載を心掛けました。多くの方にご協力をいただき、多彩な内容の誌面を実現することができましたが、その結果、利用者数が増えたか...というと、必ずしも捗々しい成果を挙げているわけではありません。ではどうするか、という解決策を持ち合わせているわけではない

のですが、今後とも普及啓発活動の一つのツールとして、『環境アーカイブズ・ニュースレター』がその役割を発揮されることを一読者として期待しています。

### 公害資料館ネットワークとの連携

私は環境アーカイブズに着任する以前から、地方自治体を中心としたアーカイブズ機関の全国団体である全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）で活動してきました。ここでは全国のアーカイブズ機関による情報交換や知識の共有がおこなわれており、アーカイブズ活動の発展と拡充の機会となっています。私自身も全史料協から多くのことを学び、また多くの人と出会いました。ですから、こうした団体の重要性は身に染みて認識しており、環境アーカイブズにおいてもその必要性を感じていました。殊に環境や公害という問題にこれまで取り組んでこなかった私には、そうした機会が不可欠だったのです。

2013年に結成された公害資料館ネットワークに環境アーカイブズは団体会員として加盟していましたから、私はネットワークのイベントに積極的に参加するようになりました。また、私が大原社研で代表を務めていた「環境・市民活動アーカイブズ資料整理研究会」では、ネットワークと合同で公害資料をめぐる現状や課題についての研究会を実施しました。こうした蓄積のなかで、2018年度に法政大学多摩キャンパスにおいて「公害資料館連携フォーラムin東京」を開催したことは個人的にとっても印象深い出来事でした。公害問題に取り組む全国の人々が多摩キャンパスで一堂に会し議論と交流がなされたことは、環境アーカイブズの歴史にも刻まれるべき一コマであるように思います。

現在、私はネットワークの幹事という役目を仰せつかっており、ネットワークの運営に関わる身となっていますが、今後とも環境アーカイブズにはネットワークの団体会員として積極的に関わっていただきたいですし、特に資料にかかる課題や実践について、多くの情報発信をお願いしたいと思っています。

### アーキビストの採用

環境アーカイブズの体制に大きな変化を与えたのが、2018年度からの専門嘱託職員の採用でした。それ以前は大学院生やポストドクターからなる週1～

2日勤務のRAによって資料整理等の業務分担がなされていましたが、環境アーカイブズのより効率的な運営システムを検討するなかで、RAの予算を振り替えて、週5日で環境アーカイブズに常駐する職員、それも専門性を生かした職種である専門嘱託職員としてアーキビストを採用することになりました。多数の応募のなかアーキビストとして採用された川田恭子さんは、資料整理においては前述の葉害スモン関係資料を担当され、その他に日々の利用者対応や2度の大原社研100周年記念展示を手掛けました。また研究においても、これまでに『大原社会問題研究所雑誌』に特集論文を寄稿するほか、日本アーカイブズ学会や公害資料館ネットワークの研究会等でも環境アーカイブズでの業務を生かした報告を積極的におこなうなど、学内外においてたいへん活躍されています。

時に資料整理や業務の進め方をめぐって川田さんと私とで意見が異なることもありましたが、それは川田さんがアーキビストとして自らの専門と見識に立脚したうえでの意見の表明であり、議論を重ねるなかでよりよい方向性を見出せたケースも少なくなかったように思います。国立公文書館における認証アーキビスト制度が開始されるなど、アーキビストへの関心が高まりを見せているなかで、その重要性を広く社会に認識してもらう意味でも、今後ともアーキビストの存在が光る環境アーカイブズであってほしいと願います。

### 環境アーカイブズの発展を祈って

そろそろ規定の字数に達するのでまとめなければなりません。書き始めてみると様々な出来事が思い返されます。それだけ、私にとって環境アーカイブズの5年間はたいへん充実した時間だったのだと言えましょう。環境アーカイブズを通じた人々との触れ合いや新たな取り組みへの挑戦とともに、何より環境アーカイブズに所蔵されている資料から得られる驚きや発見は実に興味深いものでした。資料はわれわれに多くのことを教えてくれます。だからこそ、そうした資料を現在と将来に伝えるアーカイブズの存在は社会に不可欠なのだ、改めて声を大にして言いたいと思います。これからの環境アーカイブズの発展を、その活動にかかわった者の一人として切に祈っております。

# 多様な環境資料にふれて 一文書・視聴覚資料整理の成果と課題

共立女子大学非常勤講師・元環境アーカイブズ RA 瀬尾華子

## ■これまでの資料整理を振り返る

鳥のさえずりが心地よいこの法政大学多摩キャンパスで、私が資料整理を開始したのは2017年の年末のことだ。アーカイブズ学や歴史学出身の資料整理の専門家という訳でもないのに、環境やメディアに関連する研究をしていた繋がりや、縁あって環境アーカイブズの資料整理、特に視聴覚資料の整理の業務に従事することになった。

作業に関しては、手取り足取り初歩的なことから、アーカイブズの学問としての考え方まで様々なことを教えてもらった。3年という短い間ではあったが、いくつかの資料群を担当する中でどんな成果があったのか、ここで振り返りたい。

## ■0018大崎正治氏寄贈 開発・生活環境関係資料

最初に携わったのは、國學院大学の経済学部教授であった大崎正治氏から寄贈された開発・生活環境関係資料である。大崎氏は、1970年代から2000年代にかけて水資源開発にかかわる問題に取り組み、「環境に沿った経済社会秩序の構築」(2008年、「やわらかい経済学を求めて——循環・自給・自立」『國學院経済学』國學院大學経済学会、56(3・4):434)を目指して実証的に研究した。本資料群は、その研究・教育活動の中で収集した「開発・生活環境」に関する行政や住民などの取り組みに関するものである。

資料は2011年1月に寄贈されたのち、「環境あるいは市民の取り組みに関する資料を残す」という基準のもと評価選別が行われ、F(ファイル)、M(ミニコミ)、S(スクラップブック)、V(視聴覚)、O(その他)の5つに形態別に分類された。その後、資料の封入作業及び目録作成が進められ、筆者は2017年12月よりM、V、O分類の作業を担当した。ダム開発や治水事業関連だけでなく、森づくり活動や有機農業運動などといった人々の日々の暮らしを通じた活動、また海外で実施された人類学・民俗学的な調査(下記画像)などが、ミニコミ誌や視聴覚資料を通して記録されている。



資料ID 0018-V-0002 「フィリピン・ボントク族の棚田と農業・文化」より

## ■教育・研究上で集めたミニコミ誌や映像

「教育・研究」上で収集・制作された大崎正治氏寄贈資料の視聴覚資料は、特定の環境問題の歴史や経緯の記録であると同時に、環境問題に関する経済学者の探究の記録でもある。大崎氏は理論研究だけでなくフィールドワークを取り入れ、環境問題から資本主義の矛盾をつき、独自の経済学モデルを追究した。その実際の探究の方法を資料の整理をしながら窺い知ることができ、専門の違う筆者にも学ぶことが多かった。この資料群は、2019年2月までに全ての目録が公開されている。今後、多くの学内外の研究者や学生に、その利活用をしてもらいたい。

## ■0050船橋晴俊氏寄贈 東日本大震災・原発事故関係資料(新聞)

続いて2019年2月より、法政大学の社会学部教授であった船橋晴俊氏を介して収集された東日本大震災・原発事故関係の新聞資料の整理を開始し、目録作成に取り組んだ。現在、その最終段階まで進んでいる。

この資料群には、福島民報、信濃毎日新聞、東京新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞が含まれ、地方紙、全国紙の震災報道が記録されている。紙面には、発災直後の混乱から被災地や原発事故の実情がだんだんと明らかになる経過、対応を急ぐ政府や政治の動き、そして被災者一人ひとりの声など、当時の詳細な状況が記されている。

## ■マスメディアが伝えた東日本大震災

最初に担当した資料群がミニコミ誌や調査映像を

中心としていたのとは違い、こちらはマスメディアが伝えた震災・原発事故報道だ。地震・津波といった自然の猛威はいつだって警戒が必要だが、日々の生活にかまけて忘れてしまいがちである。仕方がないことだが、東日本大震災に関連した報道も年月が経つにつれ、3月の周年的な報道ばかりにだんだんと減少してきた。

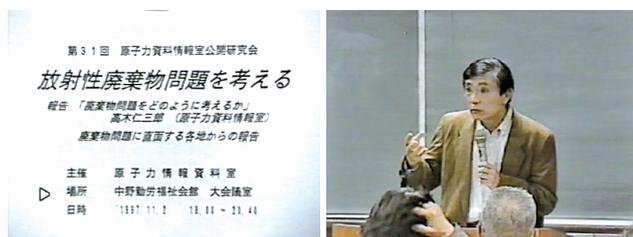
しかし、新聞報道のようなマスメディアが伝える情報は、ただ共時的に消費されるだけではない。日々被害者の数が更新される当時の生々しい報道を見返しながら目録を作成すると、自然の残酷さと同時に自然とともに生きる大切さを再度思い出すことができ、マスメディアの記録の保存は、後世に重要な教訓を残すことにつながると感じた。そして、この環境アーカイブズに保存し、環境問題について考える糧とする意義の大きさも改めて認識できた。

### ■0047 原子力資料情報室寄贈 視聴覚資料

2019年1月より担当したのは、原子力資料情報室の視聴覚資料である。1975年9月に設立された原子力資料情報室は、市民の立場から原子力に関する調査・研究を行い、得られた情報を市民活動に役立つように提供してきた。そうした中で収集された資料が、2012年2月に本アーカイブズに寄贈された。

資料の概要調査のあと、2013年2月より目録作成、2015年2月よりデジタル化作業が行われ、2016年6月に208ファイルの目録が公開された。2019年からは残りのファイルの資料整理に着手し、目録修正やデジタル化作業を経て、現在、公開に向けた校正作業等を行っている。

資料には原子力資料情報室の制作した映像資料（下記画像）の他、関係団体や公共団体の映像資料、及び映画・放送の映像資料が含まれる。原子力の諸問題に関して市民や公共団体がいかに議論を重ねてきたのかが分かる資料群である。



資料ID 0047-V-0237 「放射性廃棄物問題を考える」より

### ■市民活動やメディアの取り組み

原子力資料情報室の資料は、原子力に関する市民活動の重要な記録であり、原子力資料情報室が収集したテレビ番組や映画は、メディアによって原子力の問題がいかに語られてきたのかの記録といえる。原子力などの様々な環境問題は目に見えず、認識されにくいものだが、市民が訴えかけ、メディアが取り上げることで、この問題を社会的に顕在化させてきた。その軌跡を示してくれる本資料群もまた、多くの人に利用されることを期待している。

視聴覚資料をデジタル化する作業は、環境アーカイブズの限られた機材では時間のかかる地道な作業であり、今後も本資料群の整理は続く。しかし、実際に資料に触れるとテープなどの劣化が肌で感じられ、元々の記録媒体を保存すると同時に、新しいものに更新して残していくことの重要性を実感した。資料の大部分はデジタル化されたものの、全ての作業を完了させることはできず個人的に残念だが、残りはこれからの環境アーカイブズに託したいと思う。

### ■今後の課題として

最後に、作業を振り返りながら見えてきた課題について書き記し、まとめとしたい。

ひとつは、資料自体の受入経緯などの情報の充実の重要性である。環境アーカイブズでは資料の受入経緯の記録がある程度残されているが、資料群の背景がわかることで整理がしやすくなるだけでなく、利用者にとっても利活用のしやすいものとなる。受入段階での寄贈者への聞き取り（どのような資料なのか、なぜ寄贈するのかなど）をより詳細に残していくべきだし、その組織としての方法も検討すべきだろう。

またもうひとつは、視聴覚資料のデジタル化の作業方法についてである。3年間の任期の中で、筆者は視聴覚資料の整理に携わることが多かった。20世紀後半は「環境」が社会的に大きく問題視されるようになると同時に、映像媒体の技術的発展が目覚ましい時代でもあった。そのため環境アーカイブズにとって、映像記録の保存は重要な作業であると認識する必要がある。視聴覚資料のデジタル化についてはマニュアルが存在するが、細かいやり方を直接後任へ伝える機会を設けてもいいのではないか。この作業方法についても検討が必要だろう。

## 資料紹介

### 【0051 川俣修壽・サリドマイド事件関係資料】

サリドマイド事件とは、主に、サリドマイドを含有する睡眠薬や鎮静剤を妊婦が服用したことによって、生まれてくる胎児の四肢や内臓などに欠損を生じさせた薬害事件のことで、日本では1950年代末から60年代にかけて多くの被害児が生まれました。環境アーカイブズでは、この事件に支援者としてかわり、後に同事件を記録として残すために資料を収集したジャーナリスト川俣修壽<sup>かわまたしゅうじ</sup>氏によって寄贈された資料を所蔵しています。同名の資料群は、資料番号0006と0034としてすでに公開されており、今回紹介するのは、それらに次いで川俣氏から寄贈された資料群です。

この資料群は、川俣氏自身が収集した資料と、事件関係者らが氏に寄贈した資料によって構成されています。川俣氏は、これらをもとに、『サリドマイド事件全史』（緑風出版、2010）と『サリドマイド事件日誌』（全四巻、緑風出版、2016）を刊行し、事件の経過や全体像を明らかにしています。

事件に関する基本的な事実が明らかにされる一方で、サリドマイド事件を本格的に扱った研究はほとんど存在せず、事件に関わった諸個人や諸団体について掘り下げていくことが



課題として残されています。この点、環境アーカイブズに寄贈された資料群には、事件関係者の声をダイレクトに読み取ることのできる一次資料が存在しており、例えば、長年原告団事務局で働いていた名倉妙子氏の記した日記からは、名倉氏自身の被害者に対する思いを読み取ることができます。

サリドマイド事件に関する資料は、今後も川俣氏より環境アーカイブズへ寄贈される予定ですので、随時公開準備を進めていきます。

（環境アーカイブズRA 長谷川達朗）

## トピックス

### ◆LU募金の活用について

2019年1月31日に林喜代三さんからリーディング・ユニバーシティ法政募金(LU募金)をいただきました。LU募金は、本学の教育・研究活動への支援としていただくものです。

林喜代三さんは、如林きよみのペンネームで年賀状などのかわりにミニコミ「あいさつ代わり通信(のちのアイ通信)」を80年代から発行され、1987年から武蔵村山市の村山団地で「社会と生活の在り方を考える市民活動グループ・目高舎」という消費者運動を軸に地域のつながりと教育を考えるプロジェクトをおこなっていました。人生と運動のパートナー林治代さんを亡くされたことで、二人でつくってきたニューズレター「グループ目高舎通信」などを所蔵する機関へ有効利用を願い寄付をくださったということです。

その期待に応えるため、環境アーカイブズでは資料の利活用を進めていくことにしました。最初におこなったのは、ミニコミ資料のデジタル媒体変換です。対象は、「0042 東京都立多摩社会教育会館旧市

民活動サービスコーナー所蔵資料」のなかの林さんが携わって作成された「グループ目高舎通信」など計14ファイルです。事業は(株)国際マイクロ写真工業社に委託しました。データは、コロナ禍のなかで接触さけ、遠隔からも資料が見られるように、また多方面からの検索に耐えうるようHOSEIミュージアムの資料検索に登録予定です。将来的には、環境アーカイブズでもネット上で資料検索、閲覧が可能になるよう整えてゆきたいと考えています。とはいえ、実際のミニコミにふれてみたい方は、ぜひ環境アーカイブズにお越しください。

（専門嘱託(アーキビスト) 川田恭子）



林喜代三氏発行のミニコミ「グループ目高舎(めだかや)通信」をまとめた合冊復刻版。デジタルデータは保存のためにも活用予定

## コラム

# 環境アーカイブズの約束

## — 新型コロナ・パンデミックからの出発

法政大学大原社会問題研究所特任准教授（環境アーカイブズ担当） **山本唯人**

2020年4月より、法政大学大原社会問題研究所の環境アーカイブズ担当教員として着任しました。環境アーカイブズの前身となるプロジェクトが発足してから11年目、3代目の担当教員です。

10年を一区切りとすれば、環境アーカイブズも幼子から青年へと成長する節目です。着任早々、コロナの脅威に翻弄されながら、環境アーカイブズのネクストステージを模索し続けた1年でした。そんな問題意識を込めて、ニュースレター第6号のテーマを、「環境アーカイブズの今」にしました。

環境アーカイブズの根拠となる資料のすべては、社会を生きるみなさまからいただいたものによって成り立っています。10年を過ぎて、環境アーカイブズは何者になることができたか。その正直な姿を、読者のみなさまに見てもらい、そこに生まれる会話の中から、環境アーカイブズの「これから」を作っていきたい。そのため、今号では、いつもは聞き役を務めるスタッフ・関係者の方から、環境アーカイブズの現状をお届けしたいと思いました。

環境アーカイブズが前身の組織であるサステナビリティ研究教育機構から大原社会問題研究所に移管される際、法政大学理事会と交わした確認事項があります。その中に、運営方法は大原社研に一任するが、それまでに「受贈した資料は、受贈時の寄贈者との約束を守ってほしい」（覚書別紙「確認事項」第5項）という一文があります。基本的に自主性にゆだねられた運営のなかで、これだけが、明文化された環

境アーカイブズの「約束」です。

「寄贈者との約束」とは、資料寄贈の呼びかけに当たって掲げた、環境問題などに関する資料を「広く収集して整理し、社会的に公開して広く教育・研究に資すること」（「資料寄贈のお願い」文書より）を指しています。

着任から間もなく、過去の文書のなかで出会ったこれらの言葉が、重みをもった、指針とすべき誓いとしてよみがえって来たように思いました。

そこに、新型コロナのパンデミックが重なりました。4月1日、アーカイブズは来館を停止し、それを再開する7月1日まで、資料を「公開して広く教育・研究に資する」ことのできない状態になりました。その間、スタッフはテレワークと出勤を併用し、黙々と資料整理などを進め、資料の郵送複写サービスという新たな取り組みも始めました。

夏休み直前の7月下旬には、後期に向けた活動方針を話し合い、「資料整理・公開」と「広報、研究・教育への活用」を2本柱とする事業計画を作成しました。それに基づいて、寄付金を活用した多摩市民活動資料の一部（「目高舎」関係資料）のデジタル化、サリドマイド事件関係資料に関する公開研究会の企画、社会学部教員との連携による新入生ガイダンスの構想など、さまざまなプロジェクトが動き始めました。

動き続ける環境アーカイブズを、これからも見守っていただければ幸いです。

## 2020 年活動報告

### ◆ 日誌

**3月1日** 『法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ・ニューズレター』第5号発行

**3月31日** 担当教員・清水善仁退任

**4月1日** 環境アーカイブズの閲覧停止、担当教員・山本唯人着任

**4月8日** 法政大学からの緊急通知を受けて、環境アーカイブズの業務停止

**4月14日** テレワークあるいは自宅待機による職員勤務体制の開始（～6月14日）

**5月1日** RAのテレワーク開始

**6月5日** メールでの問い合わせ再開

**6月22日** 郵送複写サービスを開始

**7月1日** 環境アーカイブズの閲覧再開

**7月29日** 後期の事業計画作成

**10月28日** コラム「環境問題を記録する視聴覚資料」（瀬尾華子）ウェブサイトへアップ

**10月29日** 公害資料館ネットワーク資料研究会で川田恭子、長谷川達朗が報告

**11月11日** 資料整理研究会 報告瀬尾華子「担当作業の総括・引継ぎ」

**11月16日** RA長谷川達朗・山本唯人 市ヶ谷キャンパスで川俣修壽氏インタビュー

**11月16・17日** 保存箱を見直し書庫のリハウジングを実施（東京修復保存センター委託）



リハウジング後の書架

**11月30日** RA瀬尾華子退任

**12月1日** RA加藤旭人着任

**12月8日** 資料整理研究会「新入生ガイダンスについて」報告鈴木宗徳・山本唯人・小林直毅

## 利用案内

開室時間：平日9:00～16:30

土日祝日および大学が定めた休業日は、休室となります。また、夏季期間等に開室時間が変更になる場合があります。ホームページの「開室カレンダー」をご確認ください。

閲覧・見学をご希望の方は、事前に電話もしくはメールにて、来室日時をご予約下さい。

### 法政大学大原社会問題研究所・環境アーカイブズ

〒194-0298

東京都町田市相原町4342

法政大学多摩キャンパス総合棟5F

電話：042-783-2098

メール：k-archives@ml.hosei.ac.jp

ツイッター：@k\_archives1

ホームページ：https://k-archives.ws.hosei.ac.jp/

82 大宮駅 → JR埼京線快速—約32分→ 新宿駅 → 京王線準特急—約40分 → めじろ台駅 → バス—約10分

114 千葉駅 → JR総武線快速—約39分→ 東京駅 → JR中央線中央特別快速—約53分 → 西八王子駅 → バス—約22分

25 八王子駅 → JR中央線—約3分 → 西八王子駅 → バス—約22分

28 町田駅 → JR横浜線—約15分 → 相原駅 → バス—約13分

62 横浜駅 → JR横浜線—約13分 → \*新横浜駅 → JR横浜線—約36分 → 相原駅 → バス—約13分

※■内の数字は、総所要時間（乗り換え時間を除く）を表す。★新横浜駅は経由で、乗り換えではありません。

多摩  
キャンパス

※法政大学公式ウェブサイトより転載